

# あなたの声を実現するまちづくり!!

## 三原を元気にしてゆくために!

## 地域と行政の協働! 小学校区単位でのまちづくりを目指して!

### 近年の経緯

(社)三原青年会議所は2000年から協働のまちづくりを推進してまいりました。その中で、住民主導で行う合併に対する運動・市民の意見を取り入れた公共施設の計画・市民からの投稿による三原のいいところ再発見事業「あそびMAP」作成・三原の食をテーマに市民と共同で立ち上げた「みはらTEPPAN倶楽部」など、市民・企業・行政が協働してそれぞれの目的を達成する活動に力を入れてまいりました。本年度は、このような運動方針を受け継ぎ、なおかつ、各地域に着目し、地域と行政が協働することで、三原市全体が元気になってゆく活動を行っています。



委員会風景

### 地域と行政が積極的に協働を行うために

近年、三原市以外の多くの地域でも「協働」という言葉が広がり、その形を模索している状況のなか、本年度私たちは、三原市全体を元気にしてゆくために、公民館がコーディネートするまちづくり活動を提案します。現在三原市の公民館・コミュニティセンターでは、生涯学習指導員(非常勤職員)を配置し、生け花教室・書道教室などの文化の学習から、卓球などのスポーツ教室といったような生涯学習に力を入れています。私たちは現在の三原市の生涯学習活動を引継ながら非常勤職員ではなく行政職員に常駐していただき、さらに小学校区内ごとの、まちづくりの活動を入れていただくことを考えています。

### なぜ小学校区なのか?

区分けが小さいほど身近な問題、意見に気づき対応出来ます。しかし、町内会単位だとあまりに小さ過ぎて人件費や活動拠点に費用がかかり過ぎるなどの理由で現実的な提案になりません。逆に中学校区ほど大きくなると、きめ細やかな対応が出来なくなってしまうという問題や、顔みしりの関係が築きにくいということから、小学校区単位が最適だと考えます。

### なぜ非常勤職員ではなく、行政職員なのか?常駐が必要なのか?

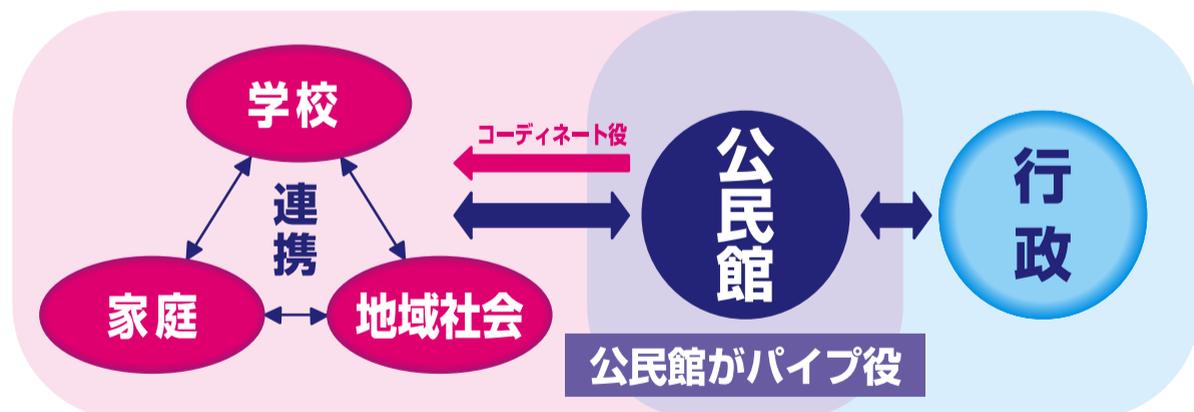
行政と地域が協働するために日本全国で様々な仕組みが出来ています。例えば、地域の中から非常勤職員を出し常駐していただく。また、行政職員が通常業務終了後自分の出身地域、又は近くの地域に分けられて、まちづくり活動を行う地域担当制という形です。しかしこの形では、職員は積極的にまちづくり活動を行う事ができません。なぜならばまちづくりのプロである行政職員は、様々な問題に対応出来る知識をもっています。また、各地域の問題に対する行政担当課と繋がりがあり、スムーズな連絡・連携・対応を取ることが出来ます。そして、行政職員は、各地域に対して様々な活動を行ったり、意見をまとめるコーディネーターになることができます。行政職員が各地域に常駐することで、

地域の身近な問題の相談場所が明確になり、行政職員は、積極的に現場に出向き、問題を肌で感じる事が出来ます。つまり行政職員が地域に常駐することで、その能力を活かしこのような形が出来れば、地域で出来ることは地域で、そうで無い問題は行政と一緒に解決してゆく流れができます。

### 公民館単位で効果的なまちづくりが行われている「邑南町(おおなん)」

私たちは、地域と行政の繋がりをより深く結びつけることが協働のまちづくり活動には重要であると考え、同様の考え方で活動が行われている地域を探した結果、島根県邑智郡邑南町の公民館での活動に着目しました。通常の行政システムでは、それぞれの課が独立し、タテの関係で業務が流れていることが多いと感じます。しかし邑南町の場合は、生涯学習課の中に地域振興課の一部が組み込まれており、しっかりとヨコのつながりもできています。これにより、公民館に行政職員を常駐させることが、行政と住民の連携に有効に働き、公民館を媒介として地域の生涯学習はもちろんのこと、地域性を活かしたまちづくり活動が行われています。また、顔・人柄をよく知っている職員が地域に常駐していれば、安心感を持って相談に行けますし、行政も町民も互いに意見の言い投げになることが少なくなります。

### 邑南町での公民館の役割



### みたかきいたか

私が画家になると言い出したとき、両親は大反対をした。「やりたいことは最後までやり続ける」という教育方針の父でさえ「どうやって食っていくんだ」と猛反対した。当然だ。芸術家の道は甘くはない。苦労するのは目に見えている。親なら誰でも反対する。そんな父を私は説得した。数学

者で誰よりも論理的だった父を。このハードルを越えなければ芸術家にはなれない。◆芸術とはイメージーションのコミュニケーションだ。自分の思いを誰かに伝える事。意見の違う相手に、自分の考えをわかってもらうこと。それこそが芸術の本質である。時には人種や国籍、時代をも超えて。だとすれば、父親くらい説得できなければ話にならない。肉親さえも説得できず、赤

の他人に思いを伝える事などできるはずもない。そう思って私は懸命に父を説得した。でも結局上手くいかなかった。あとはもう少し結果を示すしかなかった。そして、ここからは自分の問題だと覚悟を決めた。このとき私は自立したのだと思う。父親の人生ではない。自分自身の人生なのだ。それを本当の意味で悟り、覚悟を固めたとき私は私自身の人生を歩みはじめたのだ。父

が反対してくれたからこそだった。◆最近、親離れしない子どもと子離れしない親が増えている。人生の最初の一歩をお膳立てしてしまう親もいる。それではいつまでたっても親の助力に頼る甘えた大人になるだろう。安易なスターをきらせるよりもむしろ最初のハードルになってやることこそが親の責任ではないか。ライオンが我が子を谷底に突き落とすように。